

山麓探偵団通信

6月号

薫風とは、まさにこういう空気をさすのだと、なんの解説も無用で体感できる今日この頃です。

五月十九日の探偵団も、そのさわやかな風の中を、本栖湖畔竜ヶ岳のすそをぐるっと歩いてまいりました。

まずは、伊藤浩美団長の感想からお伝えしましょう。

今年の探偵団は、特別に何かを見に行くのではなく、日常の何気ない風景や近場をゆつくり歩き、おもしろい視点でくわしく見ていこうと考えています。

きょうのこの新緑も、来月になれば色が変わってしまうし、はたして来年もまた同じように見られるかどうかは、保障できません。

ですから、当たり前に見えるものの価値を、みんなで発見しながら歩き、足元の花にあいさつして回るような探偵団の一年を考えています。

▽参加者の感想(口述記)

Mさん

おかげさまで、久しぶりに歩きました。3000歩かなあ、楽し

かったです。

Nさん

山アリ谷アリ、また花や新緑、湖もきれいで、楽しい一日でした。

Sさん

新緑もきれいでしたが、一番印象にあるのは、朝の本栖湖の湖面の色です。五湖それぞれに、異なった湖水の色があるようです。

Mさん

とても楽しかったです。緑が美しく、アケビの花も印象的でした。ぜひ、実も見たいと思います。



<アケビの花>

Cさん

天気にも恵まれメンバーも最高で、楽しい一日でした。最後に、かつての森が伐採されていたハブニングもありましたね。それも印象的でした。

トピック

標高8000メートルの世界を体験された戸高雅史さんと打ち合わせの折、たまたま話題にあがったのは最近の中老年の遭難事故についてでした。GW中に起きた白馬や穂高での事故について、新聞などによると、あまりの軽装だったため低体温症になったと書かれていました。

しかし、戸高さんの話によると、実際は遺された荷物の中に防寒着や羽毛ジャケットなどの装備はあったそうです。つまり、急激な天候の変わり目が察知できず、あつというまに寒冷気におそわれ、着替えなどが間に合わなかったと考えられます。

そこで問題になるのが、昨今の登山ウェアや登山装備品の最新技術化によって、登山がし易くなったのは確かですが、そうしたテクノロジーを過信してしまい、本来生身の人間がもつ本能的な判断力が鈍くなる点を、戸高さんは登山ブームの盲点として指摘されました。鈍った五感(は、気づかぬうちに、危うい(もどきセンサー)になってしまっています。

どんな優れた雨具でも、雨の中を四時間歩くと、雨がしみこんで、体温が下がってしまうそうで、ゴアテックスの靴も然りで、けつして万能ではないことを、今一度知っておくことが大切だと痛感しました。

当たり前のことですが、その認識が甘くなっていました。大自然の変化を前に、生身の自分がどう対峙できるのか、改めてその原点を考え直す重要性を、戸高さんに学びました。

◆ 六月の探偵団活動のご案内

風と沢の音、そして生命の歓喜 (十名限定)

今年もアルピニストの戸高雅史さんを団長に、神奈川県西丹沢大棚の滝周辺の沢で野外一泊します。初めての方も大歓迎ですので、お早めにお申し込みください。

・日時(一泊二日)

・六月三十日(土) 午後一時に山中湖あみん集合

・七月一日(日) 午後一時から二時頃 あみんにて解散

・参加費 8300円(ガイド・夕食・朝食・保険代を含む)

・持ち物 雨具・食器(皿・お椀・箸・スプーンなど)・翌日の昼用

カロリーメイトなどの携帯行動食・防寒着・シュラフ・銀のマット・着替え・虫除け・任意でポケット楽器など。沢シューズは貸与(サイズは、連絡ください)。

◆ 今後の予定

・七月は、昆虫(特にセミ)の林正美先生を団長に、七月二十一日(土) 午前九時半にペンションまのにも集合を予定しております。

・八月の探偵団活動はお休みです。

発行 山麓探偵団 事務局

山梨県山中湖村平野一六九八
電話 〇五五五・六五・七〇二三